

平成30年6月14日現在

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H06918

研究課題名（和文）ドゥルーズの自然哲学を中心とした現代哲学における非人間主義の意義と射程の解明

研究課題名（英文）Of Inhumanism in the Contemporary Philosophy as the Heritage from Natural Philosophy of Deleuze

研究代表者

小林 卓也（Kobayashi, takuya）

大阪大学・人間科学研究科・助教

研究者番号：50611927

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズの哲学を自然哲学として提示し、その内実を明らかにすることを目的としている。前年度は、後期の著作である『千のプラトー』（1980）におけるイエルク・スレウの言語学および地質学の議論の分析を中心に、ドゥルーズ＝ガタリの自然哲学における非人間主義的特性を明らかにした。今年度は、前年度の研究結果を踏まえ、ドゥルーズの自然哲学に対する哲学史的影響、および、その自然哲学がいかに現代の人文科学に継承されたのかを明らかにすることで、とりわけ英米圏の人文科学に対するドゥルーズおよびガタリの自然哲学の理論的影響を特定する作業を進めた。

研究成果の概要（英文）：This research aims to affirm Deleuze's philosophy as Natural philosophy and clarify the effect to the contemporary thought. First, we analyzed discussions about a Danish linguist Hjelmslev's glossematics and geology appearing in A Thousand Plateaus, and characterized Deleuze's Natural philosophy as Inhumanism. Second, we tried to specify the relationship between Deleuze and German Idealism, and the influence of his Natural philosophy to the contemporary humanities or cultural studies including New Materialism, Speculative philosophy, the Anthropocene and so on.

研究分野：フランス現代思想

キーワード：ドゥルーズ 自然哲学 ドイツ観念論 非人間主義

1. 研究開始当初の背景

本研究が対象とするフランスの哲学者ジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze) の哲学は、構造主義と現象学が人文科学における中心であった 1960 年代当時の思想的パラダイムを変転させた点に意義がある。人間や社会 (技術・言語) が自然を対立的に支配するという従来の図式とは根本的に異なる思考様式を提起するドゥルーズの哲学は、現在の社会科学 (アクターネットワーク論、ポストモダン人類学) やフェミニズム論などの分野へと影響を与えていると考えられている。

しかし、現代へのこうした影響が認められるにもかかわらず、そもそもドゥルーズ哲学が現代哲学に与えた影響がはたしてどのようなものであったのか、その内実はまだ明らかではない。その最大の理由は、ドゥルーズ哲学を総括的に把握する論点がないためであると本研究は考える。

こうした問題意識から、本研究は、ドゥルーズ哲学を総括する論点は、その自然主義的思考、自然哲学であるということ提案する。そして、ドゥルーズの自然哲学の内実を解明すると同時に、その自然哲学を中心に、戦後から現代にかけての思想的展開をより詳細に記述することが喫緊の課題であると考えた。

2. 研究の目的

したがって、本研究は、第一に、ドゥルーズ哲学を自然哲学として規定し、その内実を明らかにすること、第二に、ドゥルーズの自然哲学がもつ現代的意義と射程を特定することが目的となる。しかし、ドゥルーズの自然哲学については、未だ、国内外での先行研究が少なく、基礎的な研究が必要となる。そこで本研究では、まず、ドゥルーズ哲学を自然哲学として規定するために、その根本的な特徴であると考えられるものとして、その非人間主義 (inhumanisme) に着目した。そして、非人間主義という論点を基点とし、(1) ドゥルーズの自然哲学が形成された思想的変遷をたどることでその全体像を明らかにすること、(2) ドゥルーズ哲学外部の哲学的文脈の影響関係を特定し、その思想史的意義を明らかにすることを目標として設定した。

3. 研究の方法

ドゥルーズ哲学を自然哲学として規定し、次いで、その現代的意義と影響の射程を特定すべく、本研究では以下の方法を採用した。

(1) ドゥルーズの著作群を精査し、彼の自然哲学が形成された思想的変遷をたどり、ドゥルーズの自然哲学の鍵概念となる非人間主義の内実を解明すること、(2) ドゥルーズ哲学内外の哲学的文脈の影響関係を精

査し、ドゥルーズの自然哲学の哲学的背景を特定するとともに、それが現代の哲学にどのような影響を与えるに至ったのかを明らかにすることを試みた。以下に (1) (2) から得られた研究成果を述べる。

4. 研究成果

(1) まず、ドゥルーズ哲学を三つの時期に分類し、その思想的変遷を分析することで、ドゥルーズの自然哲学の中心の特徴を取り出すことを試みた。ドゥルーズ哲学は、A) 『差異と反復』(1968) に代表されるカントの人間主義に対する批判、B) 精神分析家フェリックス・ガタリとの共著『千のプラトー』(1980) における自然科学の援用、C) 晩年の著作である『哲学とは何か』(1991) における自然という主題の哲学への導入という三つの時代区分を経て、自然という主題が徐々に前景化される。とりわけ本研究では、『千のプラトー』で援用されるイェルムスレウの言理学、ならびにそこで論じられる地質学の議論を分析し、①「地層」概念があらゆる経験を成立させる超越論的原理として提示されていること、②そこでの人間主体は、自立し、独立した認識主体ではなく、地層の運動の一部に組み込まれていること、③地質学の議論は、いかなる人間的特権性も含まない自然内部に諸概念の自律的運動性を見出すという意味での「非人間主義」(inhumanisme) として特徴づけることができることを明らかにした。『千のプラトー』における地質学の援用は、超越論的原理 (カテゴリー) の探求という『差異と反復』以来の哲学的企図に込められたものであるとともに、そこにおける地層化の議論に見出される自然内部における構成の問題は、『哲学とは何か』において哲学という固有の領域を確保し、哲学史を解体するとともに、哲学的思考に固有の時間性をもたらす「内在平面」の概念化を促すようドゥルーズ哲学を導いたと考えられる。

これらの議論を通して、本研究は、カントの超越論哲学における人間主義の批判、非人間主義的な超越論的原理の探求、自然内部における構成の問題がドゥルーズの自然哲学を構成する中心の特徴として理解されるべきであることを主張した。以上の研究成果については、〔雑誌論文〕①として公表されている。

(2) (1) の研究成果を踏まえ、ドゥルーズの自然哲学に対する哲学的影響の特定、および、その現代的意義を明らかにすることを目的とし、以下の研究を行った。まず、ドゥルーズの自然哲学の理論的源泉であると考えられるドイツ観念論、主として、シェリングやフィヒテをはじめとするポスト・カント派の影響関係を明らかにすべく、ドゥルーズが参照したと思われるマルシャル・ゲル一、ジャン・ヴァール、フェルディナン・ア

ルキエの著作の読解およびそれらの関連について調査した。なかでも、ジャン・ヴァールを中心とした、ドイツ哲学に対する当時の実存主義的読解という文脈の影響をドゥルーズ自身が多分に受けており、とりわけ、50年代の初期ドゥルーズにおいて、超越と内在がいかに連関するののかという論点を形成する要因となっていることが理解された。

さらに、ドゥルーズの自然哲学がいかに現代の哲学に継承されたのかを明らかにすべく、とりわけ、英米圏の人文科学に与えたその理論的影響を特定する作業を進めた。

人間と自然を対立させるのではなく、人間における身体性や物質性と、自然における形態形成の能力の両方に着目し、そこからいかに、従来とは異なる人間像や自然観を思考しうるのかを問う点にドゥルーズの自然哲学の特徴はある。こうしたドゥルーズの自然哲学、その非人間主義が明示的に、あるいは暗黙的に継承されたものとして本研究が注目したのは、第一に、90年代以降におけるフェミニズム関連分野であり、第二に、2000年代から現在へと連なる新唯物論や思弁的実在論、さらには、地球環境に対する人間の影響力を問題とする人新世 (anthropocene) といった思想的動向である。とりわけ、本研究では前者の動向にドゥルーズおよび、ドゥルーズとガタリによる自然哲学の影響を見出した。

女性の権利を主張する第一次フェミニズム、女性に固有のアイデンティティを模索する第二次フェミニズムを経て、女性のアイデンティティを認めつつも、それが社会的・言語的に構築されたものであり、また、単一のものではなく多様であることを主張する「脱構築的」な第三次フェミニズムが、ドゥルーズとガタリの諸概念を積極的に援用している。第三次フェミニズムに属する論者の議論においては、人間と人間でないものとの対立、すなわち、伝統的な人間像に対して、ポスト・ヒューマン (post-human)、あるいは人間ならざるもの (non-human) を区別する議論が見出されるが、これは、人間存在の本質を形式的な言語体系や言語構造に見る構造主義とは異なり、生命や生態系の側に人間の本質を位置づけるとともに、そこに有機性や合目的性、規範に従属されないものとしての生やそのあり方を主張する、ドゥルーズとガタリによる自然哲学の影響・援用を見ることができると言える。

しかし、第三次フェミニズムの論者のなかでも、科学技術の進展を念頭に置き、近代的な人間像を批判するロジ・ブライドツィ、サイボーグや同伴種を論じるダナ・ハラウェイにおける「ポスト・ヒューマン」に対し、これを批判するクレア・コールブルックの非人間主義 (inhumanism) が、適切にドゥルーズ＝ガタリの自然哲学を継承しているということを明らかにすることで、ドゥルーズの自然哲学が現代の思想的潮流に与えた

影響をより仔細に細分化、差異化することが可能となった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

① 小林卓也、「ドゥルーズの自然哲学序説」、『フランス哲学・思想研究』第22号、査読有、日仏哲学会、pp. 160-170.

[学会発表] (計1件)

① Takuya Kobayashi, “Ontology of the Question: Fundamental Motive in Difference and Repetition”, 10th International Deleuze Studies Conference and Camp, in Toronto, 2017.

[その他]

① (書評) 植原亮『自然主義入門 知識・道徳・人間本性をめぐる現代哲学ツアー』(勁草書房)、『週間読書人』第3208号、2017年。

② (書評) 佐藤嘉幸、廣瀬純『三つの革命 ドゥルーズ＝ガタリの政治哲学』(講談社選書メチエ)、『週間読書人』第3229号、2018年。

③ (翻訳〈共訳〉) ジル・ドゥルーズ『ベルクソニズム〈新訳〉』(叢書・ユニベルシタス)、法政大学出版局、2017年。

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 卓也 (KOBAYASHI Takuya)
大阪大学人間科学研究科・助教
研究者番号：50611927

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし

(4) 研究協力者
なし